

第 1 回『ちば里山アワード』の表彰決まる！

ちば里山大賞(最優秀)：松戸里やま応援団と松戸市みどりと花の課(松戸市)

ちば里山いいね！賞(次点)：たろやま会(四街道市)

千葉県は県の里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例を制定し、市民ボランティア等が行う里山の保全や利活用などの里山活動を支援してきました。ちば里山アワードは森林環境譲与税の導入を契機として、団体・企業等が県内での魅力発信と森林保全の重要性についての県民への普及啓発を図られた団体に対して表彰するものです。

応募は 7～9 月下旬で行われ 13 件の応募がありました。一次審査では森林課内で 6 団体が選ばれ、二次審査にては外部審査委員による審査会にてプレゼンテーション、応募書類、市町村意見等により各賞が決まり、1 月 13 日に第 1 回「ちば里山アワード」の表彰式が行われました。

最優秀の「ちば里山大賞」は、松戸里やま応援団と松戸市みどりと花の課が応募した「里やまボランティア入門講座から里やま活動への展開」が受賞、里山保全のボランティア講座の受講終了生が中心になって企画運営し、活動の支援に繋がっています。市民・行政が協働して里山ボランティアの育成を行う県内初の事例で、同様の取組が近隣の市町村にも広まってきています。松戸里やま応援団代表野口功さんの挨拶では“私たちは、2003 年以來 18 年間続けてきた里山ボランティア入門講座を松戸市と協働して実施してきました。そこから 14 の里山活動団体が生まれ、主として市内の民有林で活動しています。今回の応募では特に二つのことを強調し、一つは、講座を修了して里山活動をしている市民が講座の企画・運営の中心を担っていることです。それが受講生に親近感を与え、団体の立ち上げに繋がってきました。同時に、講座の企画・運営は、新たな里山リーダーが成長する場ともなっています。もう一つは、すべての里山活動団体が、緊密に連携していることです。松戸里やま応援団は、コロナの時期を除いて毎月連絡会を開催し、各団体は活動日毎に報告書を発信して、情報を共有してきました。オープンフォレスト in 松戸は、市内の全里山活動団体が森の所有者団体とともに実行委員会を構成し、松戸市と共催で実施しています。最近では子育てグループなどが一緒に森の体験イベントを開催するなどの広がりを見せています。貴重な都市の緑を守り活かしていくために、これからも「みどりの市民力」を発揮していきたいと思います。”と語っています。

次点の「ちば里山いいね！賞」には、たろやま会(四街道市)の「みんなでつくる自然の郷～たろやまの郷へいこう～」が選ばれました。たろやま会の活動は、四街道市の里山保全活動を複数の環境団体の協働により行っており、活動は自然環境保護団体、里山・谷津田の整備管理団体や野外保育を行う団体等、里山をフィールドに活動する様々な団体がそれぞれの得意分野を生かし、幼児からお年寄りまでの世代が参加し実施しています。里山の保全に留まらず、里山の利活用や継続的な保全活動の模範となる優良な事例です。

二次審査まで進み、惜しくも賞に漏れた 4 団体はいすみ竹炭研究会(いすみ市)、SaToYaMa よくし隊(市原市)、ふるさとネッツ(長柄町)、里山むつみ隊(八千代市)となっています。

(取材協力：県森林課、松戸里やま応援団代表野口功様)



右より松戸里やま応援団三嶋秀久様、松戸市緑と花の課中山茜様、松戸里やま応援団野口功代表、県森林水産部流通販売担当石塚健生部長、たろやま会任海正衛代表、四街道市経営企画部政策推進課橋本かれん様

各種受賞相つぐ！！

★船橋市『豊富どんぐりの森』(俊淳一会長) 市政功労賞 環境の保全に貢献されて

★千葉市『NPO 法人バランス 21』(佐藤聡子代表) 第 9 回印旛沼・流域再生大賞

★千葉市『金親博栄氏(わたしの田舎谷当工房代表)』千葉市産業・経済功労賞

24日(日曜日)

賞

賞

賞



賞状を手にする「松戸里やま応援団」の野口さん(左から2番目)ら(13日、県庁で)

松戸市と市民団体が「ちば里山アワード」

松戸市を拠点とするボランティア団体「松戸里やま応援団」と同市が行っている里山保全活動が、県の「ちば里山アワード」の大賞(知事賞)に輝いた。

表彰は、里山の整備や魅力発信に貢献した活動をたたえるため、県が今年度に創設した。今回は13件の応募の中から審査した。

同団体は、2003年か

ら活動している市民が中心となって08年に結成。松戸市と共同で、里山保全に携わる人材の養成講座を開いてきた。これまでに輩出した延べ約200人のボランティアは、植樹や下草刈りなどを通じて里山の手入れを続けている。

13日に県庁で行われた表彰式で、同団体代表の野口功さん(77)は「名誉ある最初の受賞でありがたい。今後、都市の貴重な緑を守り、生かすための活動に尽力したい」と述べた。



「松戸里やま応援団」大賞

ちば里山アワード 担い手育成評価



樹林地を手入れする市民ボランティア(松戸市提供)

ちば里山アワードは、市民ボランティアによる里山保全活動の広がりと、手入れされた里山の魅力を周知するため開催している。東京都市に隣接した松戸市は高度経済成長期からベッドタウンの開発が始まり、農地や森林が減少した。現在、市街化調整区域などで255分の樹林地が残されている。里山林は薪炭林としての利用がなくなったため、所有者が管理し切れず荒廃している場合が少なくない。

松戸市内各地で樹林地整備をする市民ボランティアのネットワーク「松戸里やま応援団」と同市による里山保全活動が、県のちば里山アワードで大賞を受賞した。市民を中心に運営する養成講座から毎年グループが生まれ、担い手を育成している点が県内初と評価された。野口功代表(77)は「緑への理解が深まる契機になれば」と喜んでいる。

市は03年から市民とともに「里やまボランティア入門講座」を始めた。修了生は毎年、15人程度が集いグループを結成。市が森林所有者との仲介役となり活動する里山林を広げている。現在は14団体、登録者数は計200人超に上る。松戸里やま応援団は活動団体間の連携を取るため08年に発足した。情報共有や技能向上、子どもたちの森林体験の受け入れのほか、連休期間に樹林地を市民に一般開放する「オープンフォレストin松戸」の開催などを行っている。野口代表は「昨年の講座は定員を超える応募があった。新型コロナの影響もあり自然への関心が高まっていると感じる。昨年は子育てグループと森でイベントを開いた。子どもたちに身近な自然の魅力を知ってほしい」と話している。



県の「ちば里山アワード」 松戸市と市民団体が大賞

松戸市の市民ボランティアで組織する「松戸里やま応援団」(野口功代表)と同市が取り組んでいる里山保全活動が、県の「ちば里山アワード」で大賞(知事賞)を受賞した。今年度に創設された表彰で、里山保全の重要性和、きれいになった里山の魅力を知ってもらうのが目的。13件の応募のなかから選ばれた。

松戸市の里山保全は、市民が中心となって運営する

養成講座から毎年グループが生まれ、担い手を育成しているのが特徴。こうした取り組みは県内初の事例で、近隣の自治体にも広まって

いるという。

市と市民による「里やまボランティア入門講座」は2003年に始まった。修了生は毎年、自主的に里山活動のグループを結成。現在、14団体が市内各所の民

有林などで地権者の理解を得て活動している。

松戸里やま応援団は団体間の連携を図るため、08年に発足した。情報共有や技術向上のほか、子どもたちの森林体験をサポートしたり、子育て団体とともに森を活用したイベントを開いたりしている。

枝の越境や落ち葉、ごみの不法投棄などで近隣住民からの苦情が絶えなかった森が整備され、本来の姿を

取り戻した。里やま応援団の各団体が活動フィールドとしている森などを一斉に公開し、身近な緑の大切さに目を向けてもらうイベント「オープンフォレストin松戸」を、12年から毎年春に開催している。

同市に残る樹林地は約250畝。市域の約4%に減少している。「都市の貴重な緑を守る活動が評価された。市民の理解が深まるきっかけになればうれしい」。野口代表(77)は話す。受賞記念の講演会を9月に開く予定だ。

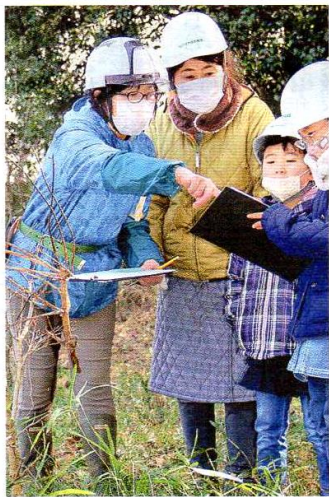
森の魅力を子らへ 多彩な体験型イベント

2月27日、松戸里やま応援団が整備を進める「秋山の森」に子どもたちの元気

な声が響いた。市民ボランティア「Save the Green@Akiyama



「Save the Green@Akiyama」と「松戸里やま応援団」が「秋山の森」で開いたイベントの参加者=2月27日、松戸市



樹木調べ



竹琴づくり

a」(西マリヤン代表)と毎月、イベントを共催している。この日は家族連れなど15人が参加した。森の一角では、里庭づくりが進む。みんなで樹木の名前を調べ、竹でこしらえた名札をつけた。説明役の高木喜久雄さん(74)はボランティア入門講座の1期生。最初の修了生が立ち上げた「一起の会」のメンバーだ。高木さんはこのあと紙芝居を2本上演し、子どもたちを喜ばせた。子どもたちは、森に生い茂る竹を使って竹琴づくりにも挑戦した。間伐などの手入れをする前は、竹林に入ることもできないほど密生していたという。母親と参加した小学6年の宇野和希君は「緑を守る活動の手伝いができてうれしい」。妹で小学4年の涼子さんは「落ち葉を片づけたり、紙芝居を見たり。森に来ると楽しいことがいっぱい」と笑顔で話した。